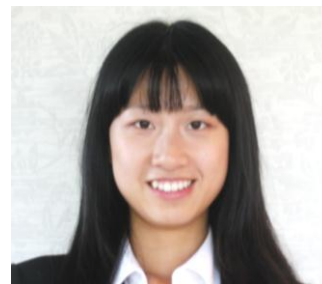


花一輪——和の姿



任 穎

一、六角堂からいけばなの歴史

日本を代表する伝統文化の一つであるいけばな。その始まりは「池坊」でした。いけばなの誕生は、人々の希望の光であり、日本人の美の心の目覚めでもありました。

およそ 1400 年前、京都の中心部に聖徳太子が創建したと伝えられる西国巡礼第十八番札所紫雲山頂法寺——六角堂。古来より大勢の方が救いを求めて参拝されました。その六角堂の池のほとりに住まいする僧侶が朝夕に仏前に花を献じていました。その僧侶は、次第に「池坊(いけのぼう)」と呼ばれるようになり、六角堂からいけばなが広まっていきました。

室町時代に、「仏前供花」から「立て花」に発展し、7つの役枝をもつ「立花」(りっか)が成立した。それは江戸時代前期に後水尾天皇の花会の指導的役割をした池坊専好(二代)によって大成された最も古い様式でした。

その後、江戸中期から後期になると、華道はそれまでの上流階級・武家階級のものから広く庶民のたしなみへと変化し、生花(しょうか)を中心に広く愛さるようになった。

今日の華道と言え、江戸時代後期文化文政の時代に流行した生花のことを指すことが多いのです。華道の流派主には、池坊や小原流、古流、未生流、都古流などがあります。

二、池坊との出会い

「花は一生の友達です」これは私が中国でいけばなの講座を受けたときの先生の言葉でした。私といけばなの出会いもこの言葉からでした。先生と一緒に後片付けをしながら、私は「先生は何年ぐらい稽古しているんですか」と聞くと、「もう 40 年近くかな」と先生が答えました。「とても長いですね」と私は驚きましたが、先生は、「私の先生は 80 代で、もう 60 年以上勉強しているよ」と、もっと私を驚かせました。

まさに、花は一生の友達です。

その二年後、私は日本の大学に進学し、留学生活が始まりました。最初の半年は、家族と離れて、一人暮らしはなかなかうまくいっていませんでした。毎日授業もいっぱ

い、料理を作るのも苦手、さらに日本語もうまくできず、友達もおらず、一人でとても寂しい思いをしていました。

しかし、その寂しさをなくしてくれたのは、お花です。留学してから半年後、ずっといけばなを勉強したかった私は、池坊の先生がいることを知り、すぐメールしました。その後、先生から電話をいただいて、今年の三月に初めての生け花のお稽古を始めました。毎回お稽古の前、みんなでお茶を飲み、美味しいお菓子を食べながら、いろいろな話をします。最初の頃、これは時間の無駄ではないかと思いましたが、今ではこの時間こそ大切な意味を持っていると考えています。というのは、始める前は、みんな落ち着いて、「和」という状態に入っていないと、いけばなの勉強をできないからだと思えます。日常の現実世界から解放されて、美の世界に入る一つのくぎりではないでしょうか。

お稽古最初の頃、花はいつもまっすぐにいけて、上に向けました。先生はそれをなおしながら、「草木も花も、表情がありますよ、たとえば、上に向くと、いかにも厳粛な顔でしょう？でもちょっと低く、手前によせると、やさしくお客さんを迎える顔になるでしょう」と言われました。そのとき、何となく見過ごしてきた一木一草、一輪の花に、さまざまな表情や美しさを新たに発見して驚きました。

また、ようやくいけた花が先生の手によって、わずかになおされたとき、何ともいきいきとしたいいけばなに姿を変えて驚いたことも何度もあります。「いけられた花のみ問題にするのではなく、花をいける過程こそを大切にしなければならない」という先生の話はいままでも常に思い出しながら、花を生けます。それで、心の底に、いつの日かすばらしい花をいけようと一人誓いを新たにしました。

お花をいけるときに、なんとも言えない充実感を体験することも魅力的です。草木花を手にして、いけることに心を集中しているとき、日常の悩み事から解放されて、美の世界に入る喜びは大きいものです。和室の畳の上で、いけることによって、私たちの周囲にひろがる空間は、不思議な魅力ある神秘的とも言える世界だと思えます。これからかもいけばなのお稽古を続けたいと思えます。

三、調和の美

調和というのは、池坊の精神であり、美の源泉でもあります。調和は広い意味に理解され、古くは、和として精神的に、あるいは哲学的に理解されています。池坊のいけばなの伝統と歴史は和の精神に貫ぬかれ、いけばなの様式美の背景にも「和合の美」が全体に働いています。

いけばなの美を感じさせる大きな要素に、調和の美があります。全体としてみる調和、部分と部分にみられる調和、それらが同じ性質のもの同志の場合、あるいは違った性質のものとともにある場合など、さまざまな調和美があります。

それでは、「調和」という言葉の中での「和」という意味は？

「白々と長い野の一筋はときに偏りつつ、見ればやわらかである。その果てが、海に入るときにも、末は天に通ずる一碧となる。

和とは、ひとつになった姿の美しさである。

花をいけるのは、人と草木との和である。その花の美しい調和は、顕れた願いである。和は尊ぶべきものである。やわらかに、ひとつになって姿からは、やがて尊いものが生まれる。」

それは『池坊花伝書』の中の「和」ということについての話です。まさに、和というのは、「一つになった姿の美しさ」のことです。池坊のいけばなはその和の姿を表現する形の一つです。

美というものにはいろいろな形がある。安定した美しさ以外に、動く形がある。いつも成長しようとしている草木は、四季の移りに応ずるさまざまな姿、その動きの生きた現われが美しい。この動きとともに、草木には常に生きた調和がある。いけばなにおいて、その調和ある動きを抽象的な通則としているのが真副体の役枝です。この真、副、体の役枝は、いける花の骨格となるもので、真を中心とした動く調和の形である。

統一ある調和の主点をこの役枝はそれぞれ保っている。お互いの動きによって、やがて一つとなる形です。

このように、池坊は「調和」という美を追求する「和の姿」の描写です。

四、伝統文化の力

池坊の次期家元、池坊由紀様のエッセイで、2010年1月15日に開催された「グローバル化と文化的アイデンティティ～日本・アルゼンチン交流から考える～」というイベントが行なわれました。「日本人の自然観といけばなについて」言及したとき、アルゼンチン側の座長が「アルゼンチンと日本の文化的交流に、いけばなが大きな役割を果たすひとつになるのではないか」と言いました。

池坊由紀様の言葉では伝えきれなかった、自然観やいけばなの歩んできた歴史、そして日本の美意識や哲学などが、まさに言葉を越えて遠い国からやってきた彼らの目に直接的に飛び込み、そして心に響いてきたのだと思います。

また、「いけばな」の持つ世界観が話題になるとき、「いけばなが日本人のアイデンティティのひとつのあらわれであると共に、それは普遍性と永遠性を持ち、まさに国境、民族、宗教を超えて人と人を結び付けていく力と輝きを放つことを改めて実感することができました」と池坊由紀様がまとめました。いつもとは違った観点から自分の世界をみることでできた池坊由紀様は、あの日、きっといけばなの力いわば伝統文化の力を感じたのでしょう。

科学技術と経済の発展が続く今、伝統文化は国または社会にとって、必要ではないと考えている人は多い。しかし、ある国や社会を分析する際、科学技術や経済発展などいわばハードの力のほかに、見えない力、いわば「ソフトの文化力」も大切だと思

います。たとえば、外国と本国の会社は投資をする前に、投資を入れる地域の歴史や文化について現地調査しなければならない。それで、伝統文化を利用して、発展の環境を作ることは、経済発展に欠かせないだろう。それと伝統文化は旅行経済、国の観光業においても、大きな役割があります。

世界のグローバル化が続いている今、国々の外交の場で、池坊由紀様のように伝統文化の力を実感することができるのでしょうか。以前参加したあるイベントで、日本人の学生さんからも同じ話がありました、海外に行った後、日本の伝統文化を紹介するとき、その必要性を痛感して、お茶と生け花を習い始めたそうです。留学生としての私も、友達に話をするとき、自分の国の伝統文化についても勉強不足を感じる人が多いです。いま中国の若者たちは、最新の技術や流行ものばかりに注目しがちで、伝統文化は忘れられてきているようです。孔子の言葉や、仏教の教え、古典名作など、読んだことのない人が多いのです。お花教室で、60代の先輩から自分の愛読書は「三国志」で、家には何十冊の「三国志」を収集していると聞いたとき、私は恥ずかしいと感じました。中国文学出身の私ですが、「三国志」を通して一度も読んだことがなかったからです。

伝統文化こそ、国々が持つ「個性」というものではないでしょうか。その「個性」を失ったままで、科学技術や経済がいくら発展しても、人々の心の「帰属感」というものはなかなか見つけられないと私は考えます。

五、未来へのお花

先週、卒業して帰国する予定の、一緒にいけばなのお稽古していた先輩のために、先生がケーキを買ってこられ簡単な送別会を開きました。みんなでお茶を飲みながら、先輩の帰国の話をきっかけとして、日中交流の話をしました。先輩将来は日本語の先生になりたいそうで、日本の姿を中国のみんなへ紹介したいとのことでした。先生から将来何になりたいのか聞かれたとき、私はお花の先生になりたいと答えました。これは私の夢です。お花を通じて、自分の目で確かめた日本、自分の身で感じた日本を中国のみんなへ伝えたいです。言葉を越えて、民族を越えて、国境を越えて美を先生から教えられたように、みんなと一緒に味わいたいというのは私の願いです。

人の世のいかなるさまにも拘らず、花は咲くことをあらためず、その花は、常に新しい種となってゆく。

一輪の花の中にも、和の姿が宿っているのです。